

23 年 4 月 / 日

財団法人 笹川記念保健協力財団  
理事長 紀伊國 献三 殿

施設名

〒533-0032 大阪市東淀川区淡路2丁目9-26

宗教法人 在日本南ブレスビテリアンミッション

淀川キリスト教病院

代表者

病院長 椋 棒 正 昌 印

平成22年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業助成  
に係る報告書の提出について

標記について、下記のとおり報告いたします。

## 記

- 1 研究・研修事業 平成22年度ホスピス緩和ケアナース養成研究事業
- 2 期 間 平成22年 4月 1日 ～ 平成23年 3月 31日
- 3 報 告 書
  - I 事業の目的・方法
  - II 内容・実施経過
  - III 成果  
(上記 I ～ III を A 4 縦判・横書 6,000字程度にまとめる)
  - IV 収支報告
    - ①助成金の主な使途(人件費以外は領収書等の証憑書類を添付)
    - ②当該助成金に関わる部分の決算書「写」  
(貴機関の全会計決算書でなく、当該助成計上部分のみで可)  
\*決算期の関係で平成23年3月18日(金)までに「写」を提出できないときは提出予定日を記入  
(提出予定日:平成23年 月 日)
  - V 添付書類  
当該施設の研修カリキュラム(パンフレットでも可)

## I. 事業の目的・方法

### 1. 目的

近年、ホスピス・緩和ケアについて社会の関心も高まり、わが国の承認緩和ケア施設も年々増加してきている。さらに 2007 年 4 月からの「がん対策基本法」施行に伴い、全国に多くの緩和ケアチームが作られ、同時に、がん看護専門看護師や、がん性疼痛看護、緩和ケア、がん化学療法などの認定看護師の育成にも関心が寄せられている。これらの流れとともに、ホスピス・緩和ケアに携わる看護師の専門的スキルやケアへの期待は高まっている。

こうした現状を背景として、特に、臨床実習に重点をおいた専門的な訓練を実施し、その実際からホスピス・緩和ケアの基本的理念や知識・技術・態度を学び、より質の高いホスピス・緩和ケアが提供できるナースを育成することを目的として、財団法人笹川医学医療研究財団からの助成により 1999 年度より「ホスピス緩和ケアナース養成研究事業」を行っている。

### 2. 方法

ナースのためのホスピス緩和ケア研修のプログラムの一環として、日本看護協会から決定された研修生に対して、看護部が窓口となり、研修案内を送付した。

## II. 内容・実施経過

### 1. 内容

#### (1) 研修の目的

- ①ホスピスおよび緩和ケアの理念を理解し、実践を通してホスピスおよび緩和ケアに必要な知識・技術・態度を習得する。
- ②チームアプローチの実際を学び、チームの中でのナースの役割を理解する。
- ③自施設において、ケアの実践のための具体策およびナースとしての役割が考えられる。

#### (2) 研修期間

原則として 3 週間

#### (3) 研修プログラム

第 1 週 ・研修の目的、目標を明確化する。

- ・担当看護師とともに行動し、ホスピスにおける 1 日および 1 週間の業務の流れを知り、ホスピスの特徴を理解する。
- ・入院受け入れの見学をし、プライマリーナースの役割について学ぶ。

第 2 週 ・担当看護師とともに行動し、日常生活の援助、症状マネジメントについて学ぶ。

- ・家族面談や看取り前後のケアの実際を学び、家族・遺族ケアの必要性について理解する。

5

- ・チームでの情報共有の仕方やカンファレンスの持ち方について学び、チームアプローチについて理解する。

第3週 ・ボランティア、伝道部、PT、OTなどの役割を学び、多職種との連携について理解する。(ボランティア研修、お茶会見学、作業療法見学)

・当ホスピスにおける入院相談から退院後のフォローアップ体制を学び、ホスピスにおける継続ケアについて理解する。(外来見学、訪問看護カンファレンス見学)

※中間振り返り(第2週目週末):研修担当者とともに、前半の研修を振り返り、後半の研修目標、内容を修正し、再確認する。

※まとめ(第3週目週末):研修の振り返りおよび評価の面接を行い、今後の課題を明確化する。自己の研修課題に沿ってレポートを提出する。

## 2. 実施経過

前述した内容で研修を実施した。＜まとめ＞に関しては、研修担当者の面接およびカンファレンスの時間を利用し、スタッフとの意見交換の場を持つと同時に、看護部の教育担当課長が面接を行い、研修が円滑に行われていたかを評価した。その結果、日本看護協会からの研修生13名全員が研修を終了し「実習修了書」を発行した。

## III. 成果

成果については研修生の実習報告書とレポートより報告する。

### 1. 実習形態について

- ① 実習期間について、研修生の全員が「適当」と回答し、「1週目で病棟の雰囲気を感じることができ、2週目で実際の援助を見ることができ、3週目でそれらを踏まえ全体を見ることができた」との意見が多く得られた。しかし、当ホスピスの在院日数が短いこと、家族の就労状況やライフスタイルの変化などの社会的背景から、ウィークデイの日勤帯だけの研修では「看取りやエンゼルメイク、他職種との関わり、家族への面談などを直接見学できなかった」などの意見もあった。研修生の実習報告書にもあるように、1週目は環境や業務の流れを知りホスピス・緩和ケアを幅広く捉え、2週目以降の学びを深めていくためにも3週間は必要な期間であると思われる。
- ② 実習時期については、11名が「希望通り」2名が「どちらともいえない」と回答していた。講義に引き続いて研修した研修生、研修までに時間が経過した研修生共に、自施設での問題や自己の課題に向き合い目的を持って実習に望み、講義内容と実践を結び付けられるよう取り組んでいた。
- ③ 実習プログラムの内容については、研修生全員が「大変良い～良い」と回答していた。外来見学や訪問看護師との連携・ボランティア研修・カンファレンスへの参加を通して、他職種との連携・チーム医療を学ぶことができたとの意見も多く、プログラムに対する満足度は高いと思われる。しかし、緩和ケアチーム立ち上げの役割を持って実習に望んでいる研修生も多く、「緩和ケアチームの関わりが見学できなかった。」との意見が多く聞かれた。今年度からのプログラム内容の変更に伴って、研修案内の際にその旨を提示しているが、ケアを中心とした現状のプログラムでは研修生のニーズに十分に答えられないことも

ある。

④ 受け入れ体制については、「丁寧で親切で安心して実習できた」「学びたいことが見学できるよう可能な限り調整してもらえた」とあり、全員が「大変良い～良い」との評価であった。

⑤ 指導体制については、「多くの看護師に丁寧に指導してもらえた」「忙しい中熱心に指導してもらえた」と感想があり、1名を除き全員が「大変良い～良い」と回答していた。「まあまあ」と回答した1名は、「ゆっくり時間を取って質問は出来なかったが、みて学ぶことができた」との意見であり、見学を通して学ぶことができていた。

## 2. 実習目標の評価

実習方法は、3週間を通し、日々の担当看護師と共に患者を受け持ち、見学を基本としてケアに参加できるようにした。ボランティア研修、外来見学、訪問看護師とのカンファレンス、伝道部主催によるお茶会への参加、作業療法活動への参加については、2週目と3週目に分けてプログラムに組み入れた。研修生に対して、毎日の研修内容と考察について当院独自の研修レポート用紙への記入を依頼し、提出されたレポートには後日担当看護師からコメントを返すようにした。必要に応じて文献の紹介や、病棟および院内の勉強会などに自由に参加できるようにした。

日々の担当看護師で不十分な点や困っていることなどは、研修担当者が適宜確認するようにした。2週目の終わりに中間評価を行い、個々の課題に対して経験できていないことはないかを確認し、可能な範囲で調整を行い、最終日にはまとめの評価を行った。

個々の目標についての評価は、多くの研修生が目標として挙げていた項目について、以下に述べる。

### ① ホスピスナースの役割について理解する

「保清や環境調整など、基本の看護技術がなにより大切であることを学んだ」「丁寧で行き届いた気配りの看護が必要であることを学んだ」「患者・家族と“共にいること”の重要性を学んだ」などの感想から、全人的ケアの実践の重要性を理解し、多くの研修生が実習を通して自己のケアや患者と向き合う姿勢について振り返りながら学びを深めていた。また、患者の状態に合わせたケア、希望に添ったケアや話し方など私達が日々のケアの場面配慮している細かな行動を見学し、その意味を考え学びを深めていることが窺えた。

### ② 症状マネジメントについて理解する

多くの研修生が、症状マネジメントに関する知識や技術について学ぶことを重要視し、具体的な症状や薬剤調整の方法など課題として挙げて研修に臨んでいた。「症状マネジメントを行っていく上で、身体的・精神的症状などが複合的に現れること、継続的なアセスメントと評価が重要であること、多職種によるチーム医療が必須であることを実感した」「患者の状態をトータルペインの視点で捉えるアセスメントが重要であることを学んだ」などの感想があった。オリエンテーションの時点で、一つひとつのケースに関して継続的に学べるように、日々意識して研修してほしいことを伝えており、課題として挙げていた研修生は、3週間という短期間の中でもプロセスを追って症状マネジメントについて学ぶことが

できていた。また、「今後は、体験している症状の意味を理解するアセスメント能力を養い、的確な症状マネジメントを行っていけるようになりたい」と自施設における自己の課題が明確となった研修生もいた。

#### ③チーム医療について理解する

患者・家族との関わりにおけるケア・治療、コミュニケーションや様々なカンファレンスの場面を見学し、ほとんどの研修生がチームアプローチの重要性について理解できたと評価していた。「様々な職種がカンファレンスを通して情報交換や共有することで、多角的に患者・家族を捉えることができる」と学んだ」「それぞれの専門性を活かし、患者に関わることでよりよいケアに結び付いていると感じた」などの感想も多く、患者を支えるチームアプローチや各カンファレンスの持つ意味やその重要性を学ぶことが出来たと思われる。その中で、ナースの役割としてどのように専門性を発揮すべきかを考えたり、話し合いを持つ機会を増やしたいなど自施設において可能な取り組みを具体的に考えることが出来ていた。

#### ④コミュニケーションの実際について理解する

「患者の言おうとしていることに腰を落ち着けて聴き、自分が理解した気持ちが正しいか確認する」「患者の視線まで腰を下ろして話を聴く姿や、思いの表出をする安全な場の提供など基本的なコミュニケーションスキルが重要であることを学んだ」「“聴こう”とする姿勢を学んだ。相手のことを“分かりたい”という気持ち、言葉を交わさなくても“共にいること”について指導者に付き体験することが出来た」などの意見が多くあり、コミュニケーションそのものがケアに繋がっていることを感じる事ができたようである。また、「家族の理解や悲嘆への介入など、最期の時を患者に寄り添うことが出来るような家族ケアが行われており、そのケアがグリーフケアとなっていることが分かった」などの感想があり、様々なコミュニケーションの場面を通して、患者だけでなく家族ケアについて考える機会となっていることが窺われた。

日常の自己のコミュニケーションスタイルを振り返る機会を得、「何のために伝えるのか」

「患者・家族の現状の受け止め方や理解度、意向、価値観の把握」などを捉えていく必要性についても学ぶことができていた研修生が多かった。

#### ⑤継続ケアについて理解する

ホスピス外来や、訪問看護ステーションでのカンファレンスを見学することにより、連携によるサポートのあり方や継続看護について理解を深められているように思われた。「シームレスな連携ができており、患者の状況を病棟・在宅へと繋げていくことが出来ていた」

「訪問看護師とのカンファレンスを通して、在宅退院に向けて具体的にどうすればよいか、在宅療養中の患者・家族の日常生活の様子など情報交換が行われており、継続したケアを知ることができた」「何のために自宅に帰るのか、を考える必要があると感じた」と在院日数が短いことや在宅療養への移行の多さに驚きながらも、早期在宅療養への移行の実際について触れることで、患者のQOLの向上という視点であらためて考える機会になっていると思われた。

#### <まとめ・今後の課題>

今年度も、当院独自の研修レポートの提出を毎日依頼し、実践と考察、感想に対して担当者がコメントを返すようにした。レポートは、日々の振り返りや考察などの学びが積み重なり自己の資料となっているようであった。また、日々の担当看護師とゆっくり意見交換できない場合でも、レポートが情報交換や意見交換を行うよいツールとなっており、疑問点の解決やより深い学びとなっていると感じられた。また日々の担当看護師自身も、自己の看護について振り返る機会となり、指導を通して新たな学びにつなげることができ、双方にとって意義のあるものになっていると思われる。

実習プログラムの内容については、当院の平均在院日数が短いことから看護の展開が早く、患者への影響を考慮し、例年 3 週間を通して見学実習としている。見学実習であることから、どのように実習すればよいのか悩む研修生もあり、研修終了後の報告書からその心理に気づかされ、実習中の十分な配慮が必要であることが例年課題である。今年度も研修担当看護師が、研修生と日々の担当看護師に積極的な働きかけを行い、コミュニケーションと連携が図れるよう関わった。研修生においては、中間評価の中で、研修態度について話し合う場を持つこともあったが、実習課題や目標を具体的にあげ修正することで研修態度を見つめなおし積極的に研修に取り組むことが出来ていた。

日々の担当看護師と共に行動し、ケアを見学することで学びを得ることを基本とする実習体制の中でも、より研修生個々のニーズに合わせた実習が行え、満足度が高まるように、受け入れ体制についてさらに検討していきたい。

指導体制については、研修生を受け入れるに当たって、日々の担当看護師として関わる上での注意点や心がけてほしい点について紙面を用いてスタッフへ詳しく説明した。また、日々の指導の中で困っていることはないか、できるだけタイムリーに声を掛けサポートしていくようにした。ほとんどの研修生から「丁寧な指導をしてもらえた」との評価を頂くことができた。今後も看護師間での情報共有やコミュニケーションを十分に図り、研修担当看護師によるサポートの充実を図り、日々の担当看護師－研修担当看護師間の連携をより強化していきたい。

研修生は、昨年同様一般病棟で緩和ケアに関心を持ち勤務する人や、緩和ケア病棟立ち上げの役割を担って実習に望んでいる人、実際に緩和ケアチームに携わっている人など、置かれている立場やニーズは様々であった。その中で、ホスピス・緩和ケア研修を通し、「一般病棟においても、病状理解や患者・家族の意向を確認するなど、大切にすべきポイントは同じであると実感した」「緩和ケアは特別なものでなく、どこの場所、どの時期においても必要である」「何のためにそのケアをするのかを考えることが重要であると感じた」と研修終了後の反省会や報告書から感想が聞かれた。研修を通して自己のケアを振り返り、看護観や死生観、自己を見つめ直す機会となっているだけでなく、新たな課題を明確にしている研修生も多く、貴重な体験になっているように思われる。

今後も、よりよい研修プログラムの提供と質の高いホスピス・緩和ケアを実践できるナースの育成に向けて努力していきたい。